

檜隈寺周辺の調査

—第155次

1 はじめに

飛鳥地域では5カ所目の国営歴史公園の整備が、キトラ古墳周辺に計画された。対象となる地域は、キトラ古墳をはじめ、檜隈寺など多くの文化財を含む広大な地域である。そのため、国土交通省の委託を受けて、奈文研、明日香村教育委員会、橿原考古学研究所が分担して試掘調査を実施することとなり、奈文研は過去の調査の経緯から、檜隈寺周辺について調査を担当することとなった。本調査は、その第1年次として、遺構の状況の確認を目的として実施したものである。調査区は、檜隈寺をはさみ、北側に第1～6区、南側に第7～12区を設けた。調査期間は2008年7月14日から2009年3月25日、調査面積は計1666㎡である。

檜隈寺は、高取山から北にのびる尾根から北西に派生した丘陵上に存在し、キトラ古墳の北西約600mに位置する。渡来系の東漢一族の氏寺として、朱鳥元年（686）には既に存在していたことが、『日本書紀』の記述からわかっている。平安時代後期には、倒壊した塔の心礎の上に十三重石塔が建てられ、今もその姿を残す。また、現在、檜隈寺の地は、阿知使主を祀る於美阿志神社境内となっており、講堂の南には社殿が鎮座する。

奈文研では、1979～1988年の間に小規模な調査も含めて計6回の発掘調査をおこなっている。1979～1982年の第1～4次調査では、金堂、講堂、西門、回廊といった主要堂塔を確認し、西を正面とする特異な伽藍配置をとっていることが判明した（『藤原概報10～13・17・19』）。これらの建物は、出土遺物から7世紀後半～末に造営されたことが明らかになっているが、出土瓦の中には7世紀前半に遡るものもあり、その時期の前身堂宇が存在した可能性も考えられている。（若杉智宏）

2 各調査区の概要

第1区

講堂北方の丘陵西斜面に直交して設定した。長さ23m、幅4m、調査面積は92㎡である。本調査区は檜隈寺第4次調査講堂北方の北側トレンチ（『藤原概報13』）と南東隅

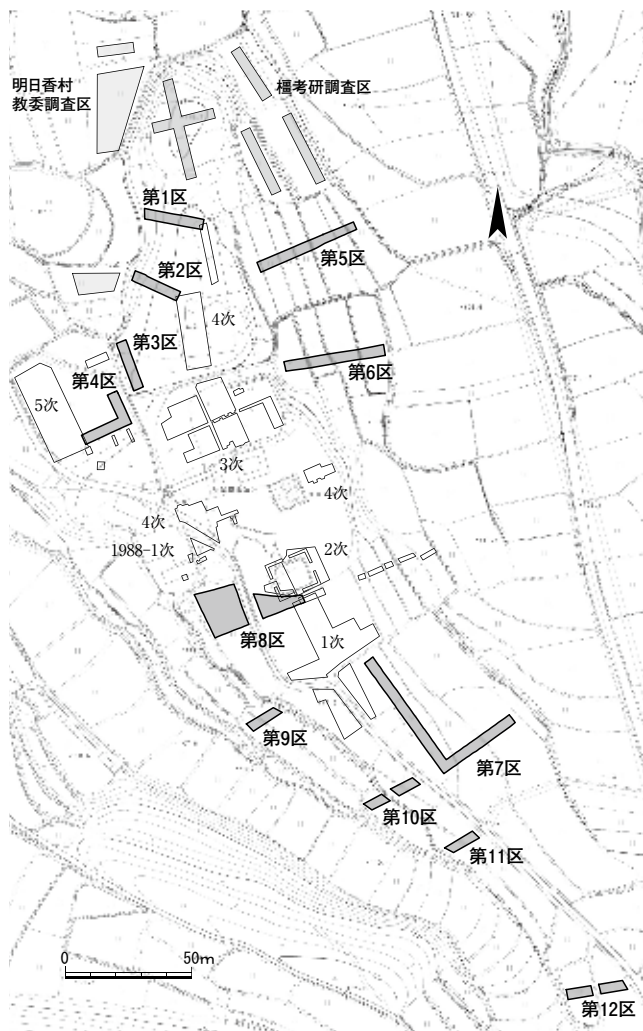


図112 調査区位置図 1：3000

が重複する。

基本層序は、上から表土（5～10cm）、遺物包含層（淡褐色細砂土・淡明褐色細砂土：10～40cm）、地山である。丘陵の斜面部分は淡褐色細砂土の下層に流土（炭混黄褐色粘質土：10～40cm）が堆積する。

遺構は、中世以降の耕作に伴う素掘溝5条を検出した。また、調査区西端の炭混黄褐色粘質土からは重弧文軒平瓦が1点出土した。

第2区

第1区の南、丘陵西斜面に直交して設定した。長さ20m、幅4m、調査面積は80㎡である。本調査区は檜隈寺第4次調査講堂北方の南側トレンチ（『藤原概報13』）と南東隅が重複する。

基本層序は、表土（5～80cm）、耕作土（15～40cm）、遺物包含層（灰黄褐色粘質土・明褐色粘質土：25～60cm）、地山

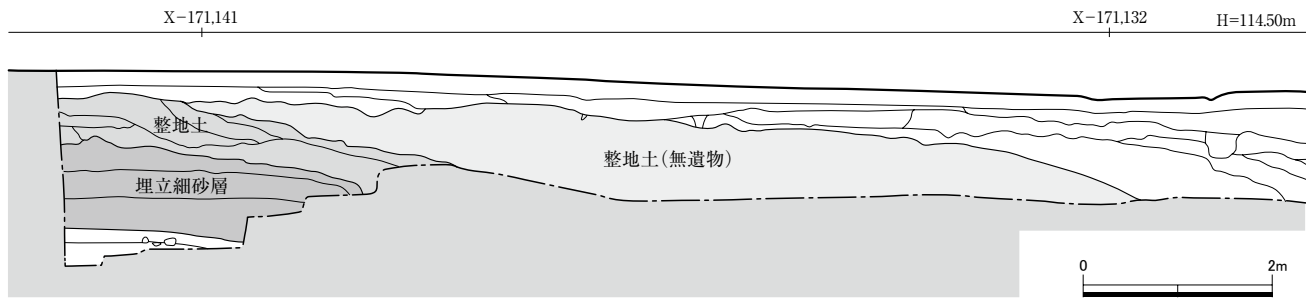


図113 第3区西壁断面図 1:80

である。丘陵の斜面部分は表土直下で流土(暗褐色砂質土・明黄褐色砂質土:10~30cm)の堆積がみられ、遺物包含層(淡褐色粘質土:10~40cm)、地山の順に堆積する。調査区東端で中世以降の耕作に伴う溝を検出した他は、顕著な遺構は確認できなかった。

第3区

講堂の北西に設定した。長さ20m、幅4mで、調査面積は80㎡である。

調査区南側の基本層序は、上から表土(15~20cm)、耕作土(10~20cm)、遺物包含層(炭泥明灰褐色砂質土:10~20cm)、整地土(暗灰褐色粗砂土・黄斑暗灰黄色砂質土:40~80cm)、埋立細砂層(明茶褐色細砂土・オリーブ灰色シルト・橙灰色シルト:80~100cm)、遺物包含層(暗青灰色粘質土・淡灰褐色砂質土:40cm以上)である。自然地形は、調査区の北西方向に向かって下がっていく状況を示す。埋立層は、地表から深さ0.6~1.8mの厚さで堆積し、粒子の異なる複数の層からなる。北から講堂北西隅に入り込んだ谷を埋め立てた際のものと考えられる。

遺構は整地土である黄斑暗灰黄色砂質土面では確認されず、調査は、断割調査によって7世紀代の土器を含む遺物包含層を確認した段階で、安全のため終了した。遺物は、埋立層下層の遺物包含層から7世紀代の須恵器、瓦が出土し、埋立層上層の整地土である黄斑暗灰黄色砂質土から、奈良時代の土師器が出土した。また調査区北側では、遺物包含層から大量の瓦が出土した。

第4区

第3区の南西に、南北14m、東西20m、幅4mのL字状に設定した。面積は120㎡。本調査区の西端は、檜隈寺第5次調査A区(『藤原概報17』)と重複する。基本層序は、上から表土(10~25cm)、耕作土(5~20cm)、地山である。検出した遺構には、石組遺構、素掘溝などがある。

石組遺構SX790 調査区北端で検出。人頭大の石と板状石を人為的に積み上げた石組で、検出範囲は東西1.8m、南北0.7m。検出範囲が狭く、遺構の性格は確定できない。石組付近から平瓦、須恵器が出土した。

南北溝SD789 SX790に取り付く短い南北溝。最大幅30

cm。SX790との取り付け部で、格子叩きをもつ平瓦2点が、両壁面に張り付くようにして出土した。

第5区

講堂の北東、丘陵東斜面に直交して設定した。長さ42m、幅4m、調査面積は168㎡である。

基本層序は調査区の東西で若干異なる。丘陵上方にあたる西側では、後世の削平のため地山までが比較的浅く、基本層序は、表土(15~60cm)、耕作土(10~30cm)、遺物包含層(暗黄褐色粘質土:20~80cm)、地山となる。丘陵下方にあたる東側は、西側に比べ残りがよく、耕作土の下層に、遺物包含層(橙褐色粘質土・淡茶灰色砂質土・橙黄灰色砂質土:20~170cm)、各期の整地土(暗褐色粘質土:10~60cm、暗黄茶色砂質土:40cm以上、淡黄褐色微砂土:20~50cm)があり、地山となる。遺構は、調査区東側で掘立柱建物、東西塀、南北塀、西側で耕作溝と中世の小穴群を検出した。

掘立柱建物SB800 調査区中央東寄りで検出。暗黄茶色砂質土から掘り込んでおり、東西3間、南北2間分を検出した。南西の隅柱を欠くことなどから、西廂をもつ南北棟の掘立柱建物である可能性がある。北壁面の壁際では柱穴が2基確認でき、建物が北へ続いていることがわかる。柱間は東西が約2.1m(7尺)、南北は約1.5m(5尺)である。柱掘方は隅丸方形で、一辺60~80cm、柱痕跡の太さは約20cmである。建物方位は真北に対し約24°西偏する。

掘立柱塀SA795 SB800の東、調査区のほぼ中央を東西に延びる。暗褐色粘質土から掘り込んでおり、調査区東端まで6間分が確認できた。柱掘方は隅丸方形を呈し、一辺40~70cm。柱間は1.5~2.1m(5~7尺)で、SB800の東西方向の柱筋とほぼ平行する。

掘立柱塀SA805 調査区東端で1間分を検出した南北塀。SA795検出面の下層、淡黄褐色微砂土から掘り込む。柱掘方は楕円形を呈し、長径50~70cm、短径30~60cmを測る。柱間は約1.5m(5尺)で、柱筋は真北に対し約9°西偏する。

土坑SK801 調査区東側北壁に設定したサブトレンチ内で検出した。円形を呈し、径75cm。深さ40cm。

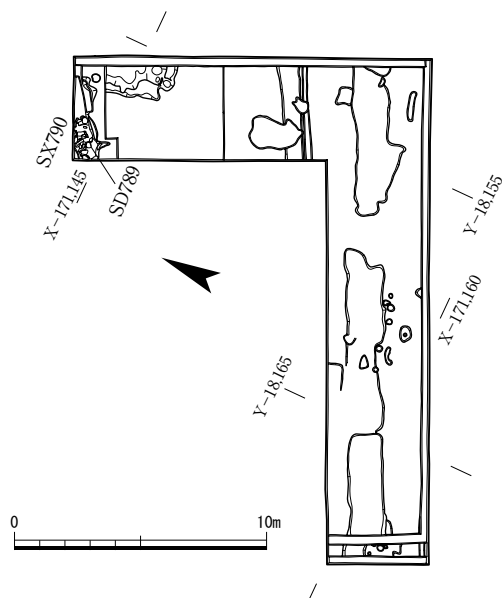


図114 第4区遺構図 1:300



図115 第4区東半部（北から）

小穴群SX802 調査区西側で検出した中世の小穴。平面は円形で、径20～50cm、検出面からの深さ10～45cm。

遺物はSX802周辺で瓦器が多量に出土し、調査区東側北壁サブトレンチから6世紀代の須恵器が出土した。

第6区

講堂東側の丘陵斜面に直交して設定した。長さ40m、幅4m、調査面積は160㎡である。基本層序は上から、表土（10～50cm）、耕作土（10cm）、中世以降の整地土（灰斑黄褐色粗砂土：10～70cm）、古代の整地土（灰斑明黄色粘質土・赤橙色砂質土：10～100cm）、地山である。ただし、第5区と同じく、古代の整地土は丘陵下方にあたる調査区東側にのみ見られる。検出した遺構には、南北塀、土坑、耕作溝がある。

掘立柱塀SA806 調査区東側にある南北塀で、2間分を検出した。ただし、南端の柱穴1基は壁面のみでの検出である。古代の整地土である灰斑明黄色粘質土面から掘り込む。柱掘方は隅丸方形で、一辺50～60cm。柱間は約1.8m（6尺）で、柱筋は真北に対し約1°西偏する。

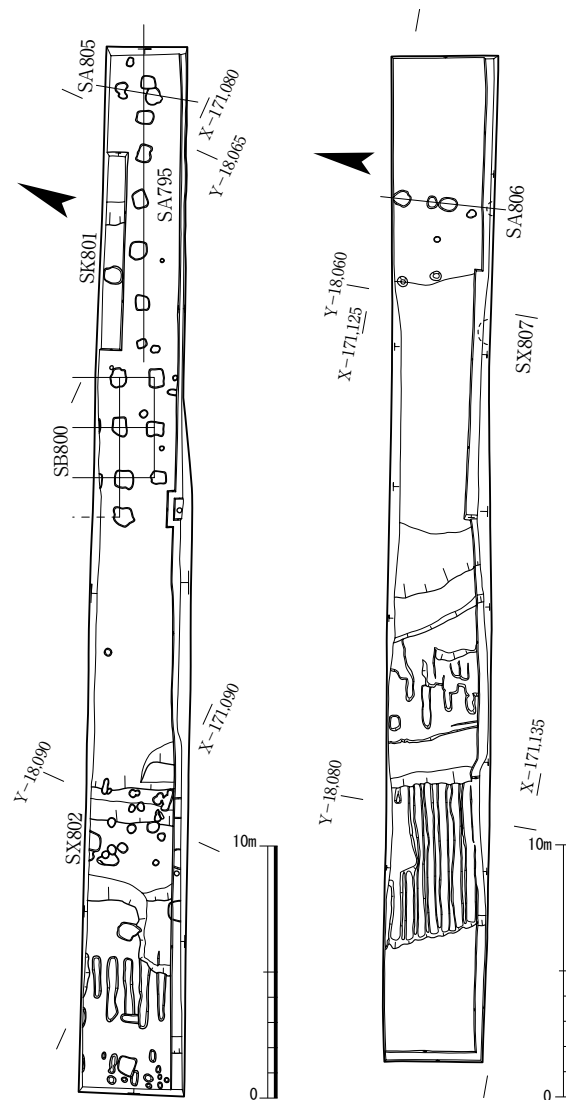


図116 第5区遺構図 1:300

図117 第6区遺構図 1:300



図118 SB800・SA795検出状況（西から）

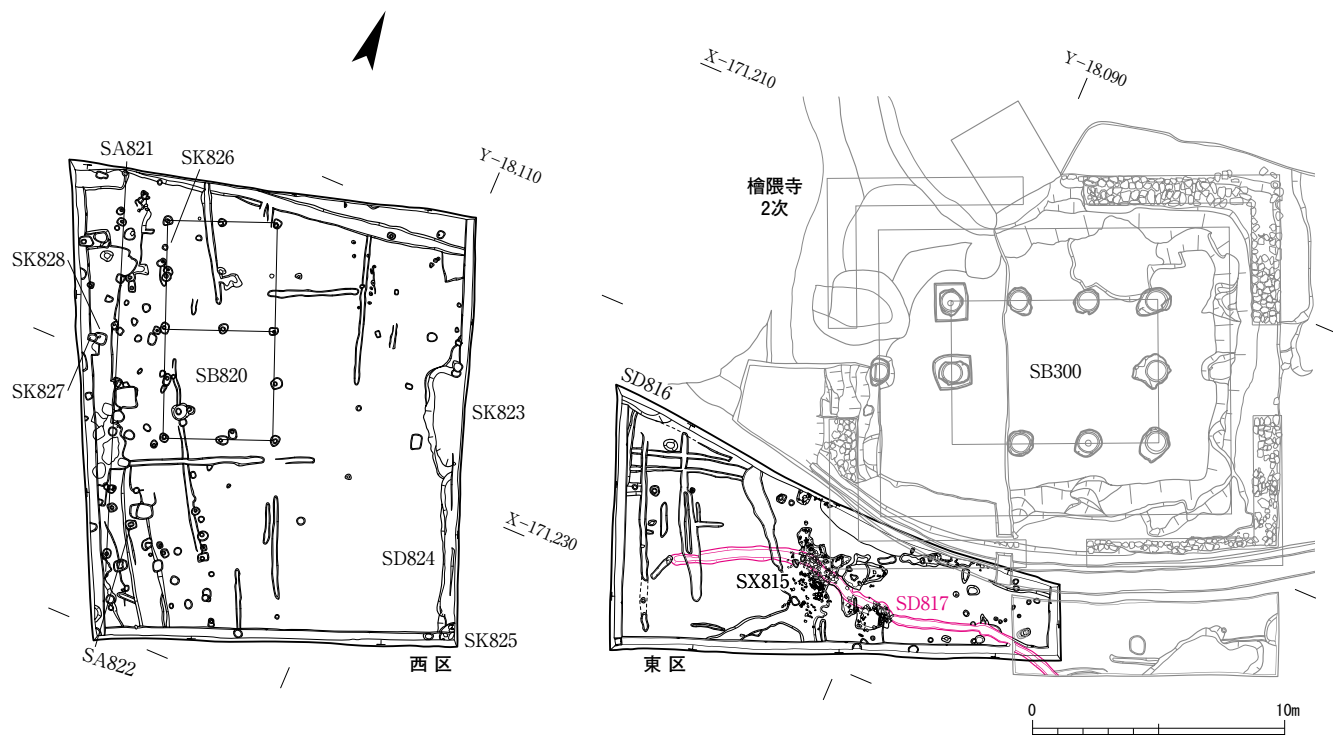


図119 第8区遺構図 1 : 300

柱穴SX807 SA806の西、調査区の南壁面で、柱穴を1基確認した。古代の整地土である赤橙色砂質土面から掘り込む。柱穴の深さは85cm。 (関広尚世・若杉)

第7区

檜隈寺金堂の南、第1次調査区(『藤原概報10』)の南東に近接する位置に、L字状に設定した。調査面積は340㎡。基本層序は、上から表土(10~20cm)、現代の耕作土(茶灰色砂質土:10~15cm)、中世以降の耕作土(灰褐色砂質土:10~30cm)、地山の順である。調査区は、丘陵の斜面を利用して作られた棚田を縦断しており、ほとんどの場所で表土、もしくは耕作土を除去すると地山が露出する。ただし、調査区西北隅部分のみは、斜面を平坦にするための大規模な整地がされており、中世以降の耕作土の下に、厚さ約70cmの整地層(明褐色粘質土)がある。

主な遺構としては、柱穴列、中世の大土坑、素掘溝、耕作溝、小穴などを検出した。

柱穴列SX810 調査区北東端付近の南東壁で検出。地山面で3基確認した。掘立柱建物となるか掘立柱塀となるかは不明である。西端の柱穴以外は壁面で検出できたのみで、平面では確認できていない。柱穴の径は0.7m、深さ0.25m。柱間は1.5m(5尺)。掘方には遺物は含まず、時期は不明である。

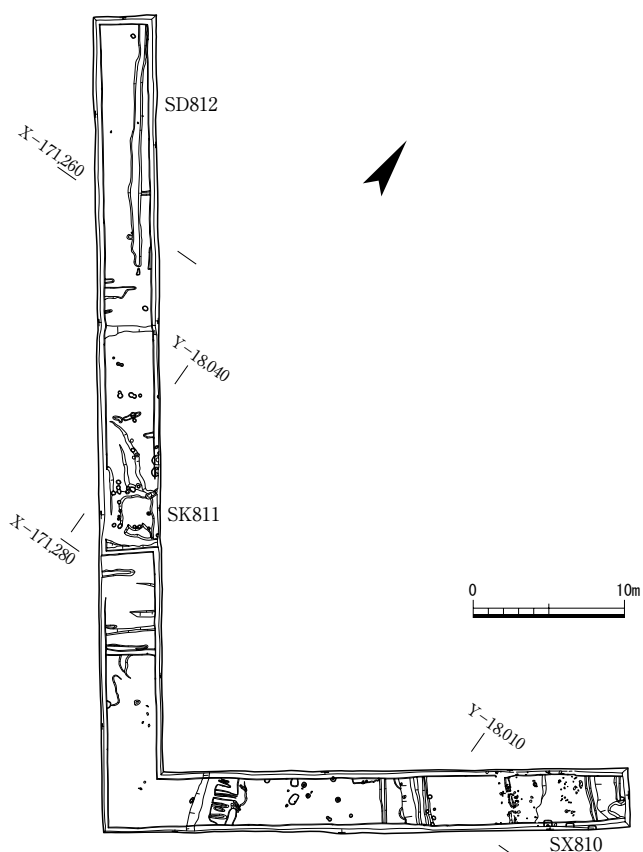


図120 第7区遺構図 1 : 500

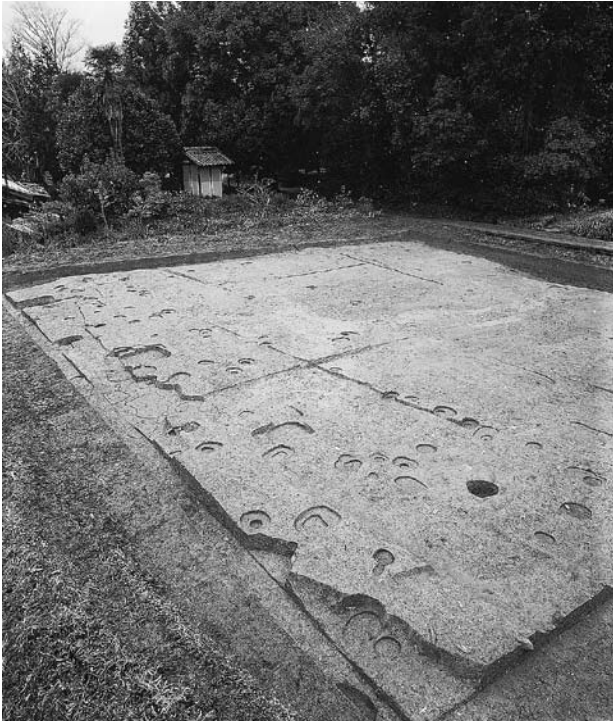


図121 第8区西区全景（南から）

土坑SK811 大量の焼土と炭を含む中世の大土坑。地山面で確認した。形状は不整形で、南北長約4m。土坑の西端は調査区外に延びる。深さは20～60cmを測る。

SK811を検出した付近は、長辺約20m、短辺約15mの土壇状の高まりとなっている。高まりは、金堂からは南東に約70m離れた位置にあり、軸を真北から西に振る檜隈寺の伽藍方向を考えると、この高まりの上に檜隈寺にかかわる何らかの建物が存在していた可能性が期待された。しかし調査の結果、現状ではそのような遺構は確認できず、中世の大土坑を検出したのみである。

素掘溝SD812 地山面で検出した。幅約70cm、深さ20cm。溝埋土には遺物は含まず時期は不明である。

第8区

檜隈寺金堂の南に隣接する。金堂西側を走る南北道路をはさんで、東区と西区に分けて設定した。調査面積は東区109㎡、西区266㎡。

東 区 基本層序は、上から表土（5～15cm）、耕作土（茶褐色砂質土：20cm）、中世の整地土（灰褐色砂質土：10cm）、地山の順である。ただし調査区東端付近は、中世の整地層はみられず、耕作土を除去すると地山が露出する。遺構は、中世の整地面と地山面で検出した。

東区は、金堂下成基壇の南西隅部分にあたるが、後世

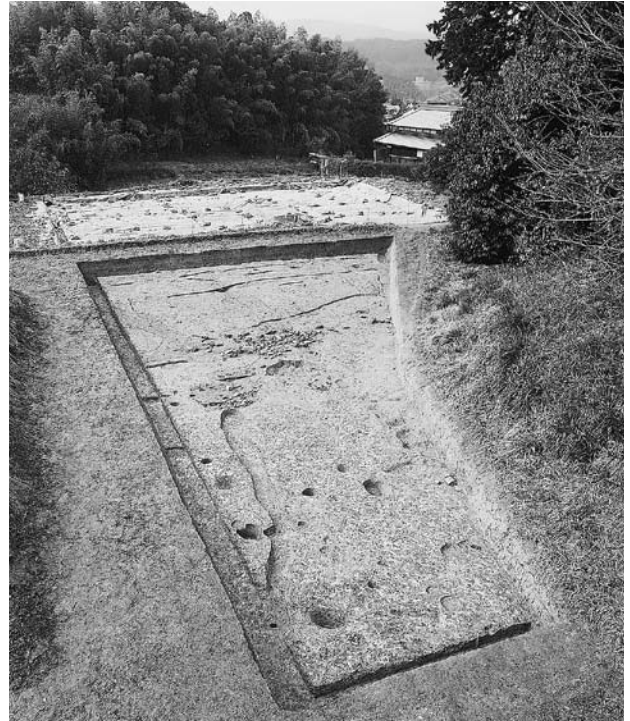


図122 第8区東区全景（東から）

の耕作にともなって、基壇土および地山削り出しの基壇の大部分は削平されており、基壇外装の玉石も抜き取られていた。主な遺構としては、瓦溜、素掘溝、耕作溝、小穴などを検出した。

素掘溝SD817 大きく蛇行する中世の素掘溝。第1次および第2次調査でも検出されている（『藤原概報10・11』）。地山面で検出した。瓦溜SX815より古い。

瓦溜SX815 中央部で、不整形の皿状土坑を中世の整地面で検出した。大きさは4.0～9.5m、深さ5～15cm。SX815から出土した瓦類には、金堂SB300の所用瓦と考えられている輻線文縁軒丸瓦や、三重弧文軒平瓦、垂木先瓦、方形の尾垂木先瓦などがあり、金堂で使用していた瓦を廃絶時に捨て込んだ土坑と考えられる。

素掘溝SD816 調査区西北隅部分で検出した素掘溝。中世の整地面で検出した。北肩が調査区外になるため、幅は不明。深さは35cm。

西 区 東区とは道路をはさんで、約1m低い位置にある。基本層序は、上から現代の耕作土（10～25cm）、中世以降の耕作土（灰褐色砂質土：5～15cm）、中世の整地土（褐色砂質土：15～25cm）、地山となる。調査区中央部では中世の整地層はみられず、耕作土を除去すると地山が露出する。遺構は、中世の整地面および、地山面で検出した。

なお、調査区北東部は、檜隈寺西門SB500から金堂SB300へとりつく回廊の想定部分にあたるが、後世の削平が著しく、古代の遺構は検出できなかった。主な遺構としては、中世の掘立柱建物、掘立柱塀、土坑、素掘溝、耕作溝、小穴などを検出した。

掘立柱塀SA822 調査区南西部で、中世の整地土を下げた地山面で検出した。3間分を確認し、柱掘方は長方形で長辺45～55cm、短辺30～45cm、柱間は1.5m（5尺）である。西区のなかでは最も古い遺構であるが、掘方には遺物を含まず、時期は不明である。ただし、柱筋が檜隈寺の方位と合わないことからすると、SA822が檜隈寺にかかわる遺構であるとは考え難い。

掘立柱建物SB820 中世の整地面で検出した掘立柱建物。桁行4間、梁行2間、柱間は1.2m（4尺）。柱掘方の径は40～50cmと小型で、深さは15～35cm。建物内中央部には、間仕切柱と思われる柱穴が1基みられる。

掘立柱塀SA821 SB820の西1m、中世の整地面で検出した。7間分を確認。柱間はSB820と等しく、方位もほぼ揃えるので、SB820にともなう塀と考えられる。柱穴の掘方は径30～50cm。深さ20cm。

小穴SK826 径30cm、深さ15cmの小穴。中世の整地面で検出。埋土からは、中世の完形の土師器皿が2枚、合わせ口になって出土した（図125）。

土坑SK827 中世の整地面で検出した廃棄土坑。大きさ90cm、深さ20cm。炭を大量に含み、瓦器碗、土師器皿などが大量に出土した。

土坑SK828 中世の整地面で検出した廃棄土坑。SK827より古い。方形で、1辺80cm、深さ20cm。

土坑SK823 調査区東端で検出した大土坑。中世の整地面で検出した。東半分は調査区外になる。南北の大きさは2.2m。深さ60cm。底面には、マンガンが沈着しており、水を溜めるための土坑であったと考えられる。

素掘溝SD824 SK823に流れ込む溝。中世の整地面で検出した。溝の東端は調査区外にあたるため、幅は不明。深さ15～40cm。SK823につながる部分は土坑状にふくらみ、深さも深くなっている。

土坑SK825 調査区南東隅、SD824の下で検出した。土坑の大部分は調査区外にあり、大きさは不明。深さ45cm。人頭大の礫と瓦を含み、金堂基壇外装の石を捨て込んだ土坑とみられる。

（石田由紀子）

第9区

檜隈寺金堂の南約60m、丘陵の西斜面に設定した。調査面積は52㎡。基本層序は耕作土（15～25cm）、中世以降の整地土（暗赤色砂質土・暗褐色砂質土：20～150cm）、古代の整地土（明褐色砂質土・黄褐色砂質土：15～50cm）、地山である。ただし、調査区東半では、古代の整地層はみられず、中世の整地土を除去すると地山が露出する。地山面は、調査区東半では平坦な面をなすが、中央付近で角度を変え、急斜面となり西へ落ちる。

遺構は、土坑、中世の耕作にかかわる素掘溝、小穴などを検出した。土坑は古代の整地面で7基確認したが、いずれも埋土に遺物を含まず、時期の確定は難しい。

本調査区では、檜隈寺にかかわる顕著な遺構は確認できなかった。

第10区

金堂の南東約95m、丘陵西斜面に設定した。棚田の斜面をはさみ、東区と西区に分かれる。調査面積は、東区38㎡、西区32㎡。

東区 基本層序は、上から耕作土（20～30cm）、中世以降の整地土（灰褐色砂質土：10～35cm）、地山である。検出した遺構は、中世以降の耕作にともなう素掘溝、小穴のみで、古代の遺構は確認できなかった。

西区 基本層序は耕作土（20～25cm）、中世以降の整地土（灰褐色砂質土・暗褐色砂質土：10～90cm）、古代の整地土（淡赤褐色砂質土：15～20cm）、地山である。ただし、調査区東端では整地層がみられず、耕作土直下が地山となる。検出した遺構には、素掘溝、土坑、耕作溝、小穴がある。

素掘溝SD845 調査区中央西寄りで検出した北西－南東方向の素掘溝。地山面から掘り込む。幅1.0～1.4m、深さ10～20cm。埋土から7世紀代の須恵器が出土した。

土坑SK847 調査区北西端で検出した。地山面から掘り込む土坑で、北半が調査区外となるため大きさは不明。

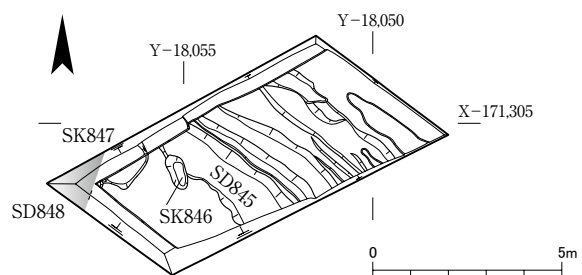


図123 第10区西区遺構図 1：200

検出範囲では東西1.3m、深さ15～35cmを測る。埋土より、7世紀代の須恵器が出土した。

土坑SK846 調査区中央西寄りで検出した。長径1.0m、短径0.4m、深さ30cmの楕円形を呈する。地山面で検出し、SD845より新しい。

素掘溝SD848 調査区北西隅を走る素掘溝。南西壁面および北西壁面のみでの検出のため、幅は不明。深さ15～20cm。地山面から掘り込んでおり、SK847より古い。

第11区

金堂の南東約125m、丘陵の西斜面に設定した。調査面積は49㎡。基本層序は、上から耕作土（15～35cm）、中世の整地土（暗灰褐色砂質土・黄灰色砂質土・黒褐色砂質土：20～140cm）、地山である。地山面は、調査区東半ではなだらかな緩傾斜面をなし、中央付近から西では角度が急になり谷へ向け落ち込むことを確認した。

検出した遺構は、中世以降の耕作にともなう素掘溝、小穴である。本調査区では、後世の削平が著しく、檜隈寺にかかわる遺構は確認できなかった。

第12区

金堂の南東約200m、丘陵の西斜面に設定した。棚田の斜面をはさみ、東区と西区に分かれる。調査面積は、両区とも40㎡。

東区 基本層序は、上層から耕作土（15～20cm）、中世以降の整地土（暗褐色土：10～15cm）、地山である。整地層は調査区北西部にのみみられ、その他では耕作土を除去すると地山が露出する。検出した遺構は、素掘溝、土坑である。いずれも中世以降の耕作にともなうものと考えられる。

西区 基本層序は、上層から耕作土（15～20cm）、中世以降の整地土（灰褐色砂質土・赤褐色砂質土：10～110cm）、地山である。地山は緩やかな傾斜をもち西へ落ちる。検出した遺構は、中世以降の耕作にともなう素掘溝のみで、古代の遺構は確認できなかった。（若杉）

3 出土遺物

土器 各調査区から、整理箱14箱分の土器が出土した。古代の土師器、須恵器と、中世の土師器、瓦器、陶磁器がある。そのうち、第3区、第4区、第5区出土の古代の土器（図124-1～6）と第8区出土の中世の土器（図125-7～18）についてその概要を述べる。

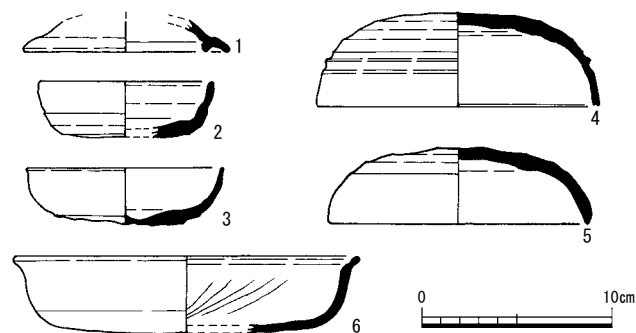


図124 第3～5区出土土器 1：4

第3区 1は暗青灰粘質土出土の須恵器杯G蓋。復元口径10.0cmで、外面には自然釉が降着する。2は明茶粘質土から出土した須恵器杯G。復元口径9.1cm、復元高3.0cmで、底部はヘラ切り不調整。いずれも、飛鳥Iの新しい段階から飛鳥IIにかけての特徴を示す。6は整地土から出土した土師器杯A。b0手法で調整し、磨滅のため器表が荒れているが、一段の粗な放射暗文が確認できる。径高指数は22.6で、平城宮土器Ⅲ新段階に属する。同様の土器が他にも数点出土しており、大規模な整地の時期を示すものである。

第4区 3はSX790から出土した須恵器杯G。口径10.3cm、器高3.1cmで、底部はヘラ切り不調整。飛鳥Iから飛鳥IIにかけての特徴を示す。

第5区 古代の整地土下の堆積層から、古墳時代の土器が出土した。4は暗黄茶砂質土出土の須恵器杯H蓋。肩部に稜があり、口縁端部には段を有する。6世紀前半のMT15～TK10型式に属する。5は、灰斑橙黄粘質土出土の須恵器杯H蓋。天井部のロクロケズリの範囲は広い。6世紀末頃のTK209型式に属する。

第8区 金堂南西の第8区では、古代の遺構は削平されて全く残存していなかった。出土土器もそれを反映し、中世のものが多く、ここでは、SK828・SK827・SK826出土土器について略述する。

SK828からは、土師器Ⅲ（7～9）、瓦器Ⅲ（13～15）、瓦器Ⅳ（17）が出土した。土師器Ⅲには口径9.1cm、器高1.3cmの小型のもの（7・8）と、口径13.0cm、器高2.5cmの大型のもの（9）がある。9の内面には漆が付着する。瓦器Ⅲは口径8.0～8.5cm、器高1.4～1.8cm。13・15は底部内面にジグザグ状の暗文を施す。瓦器Ⅳの高台は、断面三角形で低い。口縁部外面に粗いミガキ、内面には渦巻き状の粗いミガキを施す。13世紀中葉のもの。

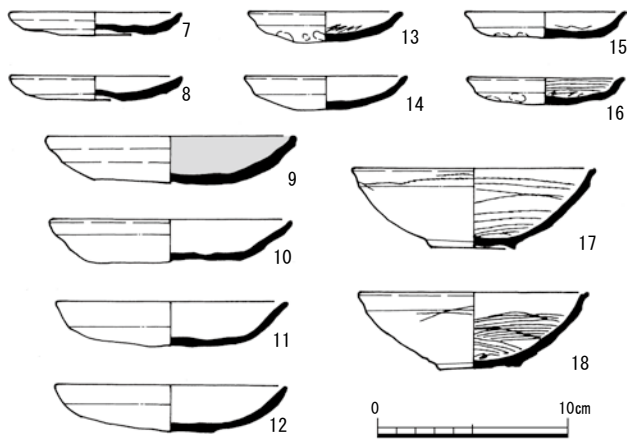


図125 第8区出土土器 1 : 4

SK827からは、土師器皿 (10)、瓦器皿 (16)、瓦器碗 (18) が出土した。土師器皿は、口縁部外面を幅狭くヨコナデする。瓦器皿の底部内面には、ジグザグ状の暗文を施す。瓦器碗は、高台が低く、外面のミガキはほとんど省略している。内面には渦巻き状のミガキを施す。13世紀後半のものと考えられる。

SK826からは、土師器皿 (11・12) が出土した。調整は口縁部、底部ともナデ。13世紀後半。

金属・石製品 全調査区を合わせて小コンテナ9箱分の鉄釘、焼土、砥石などが出土した。(関広・若杉)

瓦 類 瓦類としては、軒丸瓦7型式20点、軒平瓦6型式32点、垂木先瓦2型式11点、尾垂木先瓦1点、鴟尾3点、鬘斗瓦1点、隅切瓦1点、戯画瓦1点、丸瓦1711点 (180.9kg)、平瓦11306点 (570.3kg) が出土した。各調査区から出土した軒瓦の型式および瓦の量は表10・11の通りである。

瓦類の分布は、第1～12区全体に広がるが、古代の遺構に伴っている可能性のあるものは第4区SD789出土瓦のみで、その他は包含層もしくは第7区SK811や第8区SX815など中世の遺構から出土したものである。瓦の出土傾向としては、檜隈寺の伽藍に近い調査区に瓦の出土量が多く、なかでも金堂基壇に隣接する第8区では、軒

瓦をはじめ、垂木先、尾垂木先瓦などを含む大量の瓦類が出土した。

以下、軒瓦をはじめとした主要な瓦類について報告する (図126)。なお、ローマ数字による型式名は檜隈寺の型式名である (花谷浩「京内廿四寺について」『研究論集XI』2000、奈良文化財研究所)。1は、軒丸瓦Ⅰ型式B。蓮弁は八弁で、弁に複子葉と火炎文を加える。焼成は硬質で、胎土に長石、石英を多く含む。色調は茶灰色。第9区出土。2は、山田寺式軒丸瓦のⅠ型式D。山田寺所用軒丸瓦とは異範で、色調と焼成も赤褐色でやや軟質と檜隈寺所用瓦の特徴をもつ。第8区の瓦溜SX815出土。3は、角端点珠の素弁蓮華文軒丸瓦Ⅰ型式F。焼成は硬質で、暗灰色。SX815出土。4は、金堂所用瓦の幅線文縁軒丸瓦のⅡ型式A。焼成は良好で灰白色。胎土には長石、石英、クサリ礫を少量含む。SX815出土。5は、藤原宮式軒丸瓦のⅢ型式A。平城京・藤原京の型式では6275Gとなっている。焼成は硬質で、胎土に長石、石英を多く含む。色調は灰色。第5区出土。6は、平城宮6232型式Aと同範のⅣ型式A。赤褐色の色調で、焼成は良好。第3区出土。

7～9は、三重弧文軒平瓦Ⅱ型式。7はⅡ型式A。弧線が扁平で幅広い。顎部が剥離しており、剥離部分には指オサエの痕が残る。焼成は軟質で、長石、石英、クサリ礫を含む。色調は黄灰色。8はⅡ型式B。第1・2弧線の突出が第3弧線よりも強く、弧線の断面が蒲鉾形になるのが特徴である。長石、石英を大量に含む粗い胎土で、焼成は硬質。色調は灰色。第8区SK823出土。9はⅡ型式C。Ⅱ型式Bと同じく弧線の断面は蒲鉾形だが、弧線の突出は第1～3弧線とも同じである。浅い段顎には縦縄タタキの痕が残る。焼成は良好で、胎土には長石、石英、クサリ礫を多く含む。SX815出土。10は、範型施文の四重弧文Ⅱ型式D。焼成はやや軟質で、精良な胎土に少量のクサリ礫を含む。SX815出土。11は、四重弧文軒平瓦Ⅱ型式Eである。顎部が剥離している。第4次調

表10 第155次調査出土丸・平瓦集計表

調査区	丸 瓦	平 瓦	調査区	丸 瓦	平 瓦	調査区	丸 瓦	平 瓦
第1区	124 (12.1)	606 (38.1)	第5区	52 (6.7)	281 (27.0)	第9区	726 (70.4)	194 (253.6)
第2区	161 (16.6)	746 (40.3)	第6区	—	—	第10区	188 (15.9)	2012 (88.0)
第3区	335 (50.5)	813 (86.3)	第7区	38 (5.4)	137 (13.8)	第11区	—	26 (0.4)
第4区	13 (0.7)	160 (11.0)	第8区	726 (70.4)	6194 (253.6)	第12区	—	29 (0.5)

* 各調査区の丸・平瓦の数値は点数、() 内は重量 (kg)。

表11 第155次調査出土軒瓦および道具瓦集計表

調査区	種 類	型 式	点 数	調査区	種 類	型 式	点 数	調査区	種 類	型 式	点 数			
第1区	軒丸瓦	巴	1	第7区	軒平瓦	Ⅱ B	1	第8区	垂木先瓦	A	10			
	軒平瓦	Ⅱ B	1		鴟尾		1			B	2			
	Ⅱ C	1	第8区	軒丸瓦	Ⅰ B	1	不明			1				
第2区	軒丸瓦	Ⅲ A		1	Ⅰ D	1	尾垂木先瓦			1				
		巴		1		Ⅰ F			1		1			
	軒棧瓦			1		Ⅱ A			2	戲画瓦		1		
第3区	軒丸瓦	Ⅳ A		1		Ⅱ AかB	3	第9区	軒丸瓦	Ⅰ B	1			
	軒平瓦	Ⅱ A		3			不明			2	Ⅲ A	1		
		Ⅲ A	1	軒平瓦						Ⅱ A	4	不明	1	
		Ⅲ B	1		Ⅱ B			4	軒平瓦	Ⅱ A	Ⅱ A	1		
第4区	軒丸瓦	Ⅲ A	1					Ⅱ C			2	Ⅱ C	1	
								Ⅱ E			1	Ⅲ A	2	
第5区	軒丸瓦	Ⅲ A	1		Ⅲ A	3		不明			鴟尾		2	
	軒平瓦	Ⅲ A	1											第11区

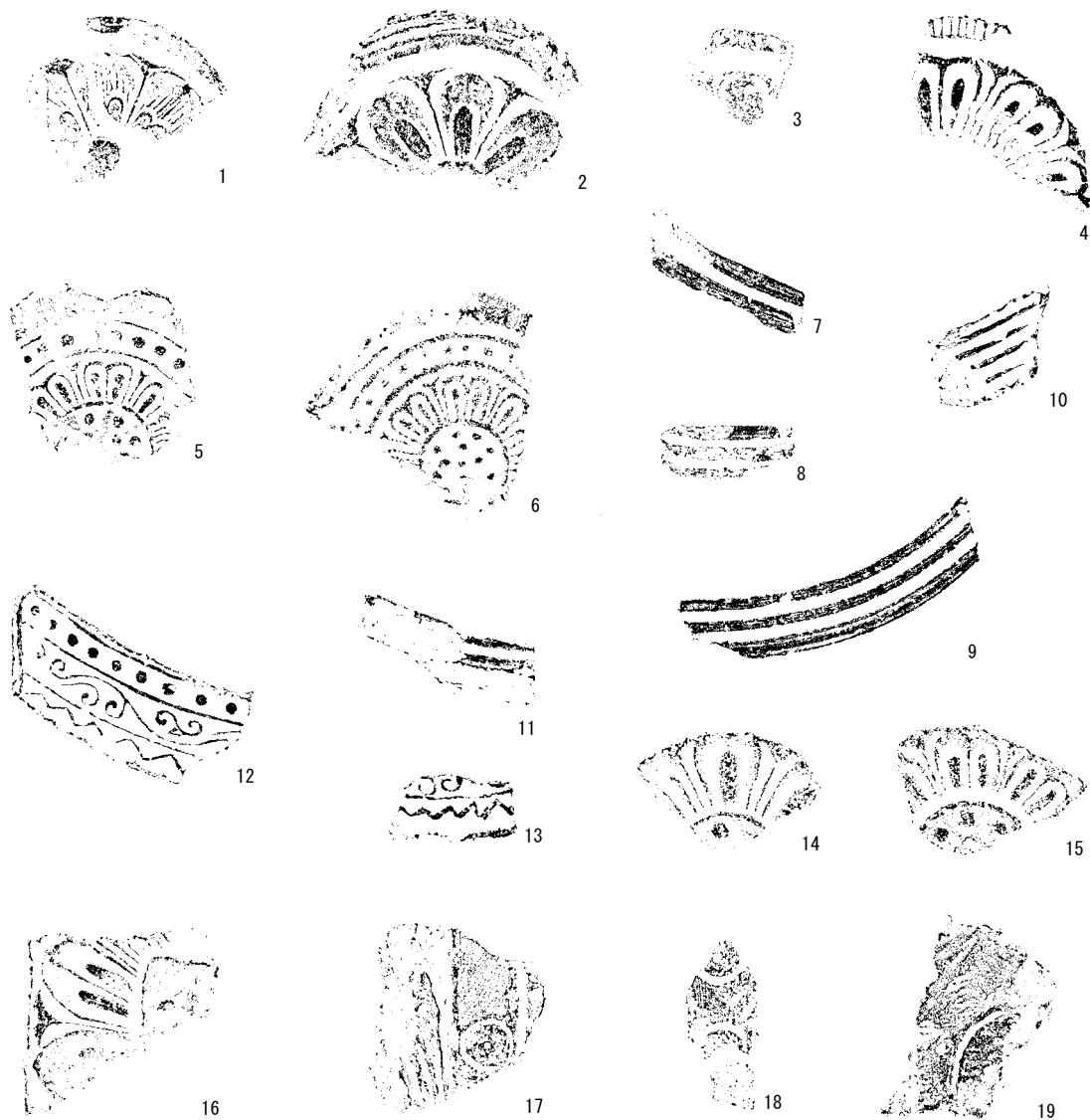


図126 第155次調査出土瓦類 1 : 4

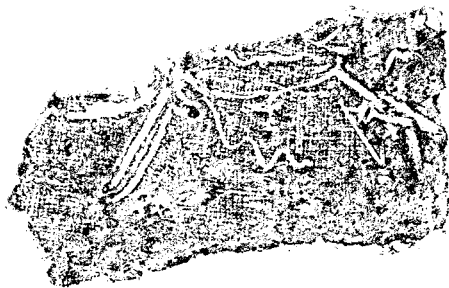


図127 第8区出土戯画瓦 1:2

査で出土例がある（『藤原概報13』）。クサリ礫を多く含み、焼成は軟質。色調は灰白色。SX815出土。12・13は右偏行唐草文軒平瓦。12は軒平瓦Ⅲ型式A。平城京・藤原京の型式では6641L。焼成は良好で、胎土に長石、石英を多く含む。色調は灰色。SX811出土。12は段顎をもつが、曲線顎のものも出土している。曲線顎のものは、脇区を切り落とす。13はⅢ型式B。焼成は軟質で、赤褐色を呈する。第3区出土。

14・15は金堂所用の垂木先瓦。14が単弁八弁蓮華文の垂木先瓦A、15が複弁八弁蓮華文の垂木先瓦Bである。焼成は両者とも良好で、胎土には長石、石英を大量に含み、色調は赤褐色。いずれもSX815出土。16は方形の尾垂木先瓦。焼成はやや軟質で、胎土には長石、石英を大量に含み、色調は灰黄色。17～19は鴟尾の破片。17は、縦帯部分から鰭部が残る。縦帯上にはコンパス施文の連珠文をもち、鰭部には、複弁蓮華文状の文様をもつ。SK811から出土した。18は縦帯部分の破片。コンパス施文の連珠文は17と共通するが、連珠文を施す間隔や珠文の大きさが異なる。19も鴟尾の胴部もしくは腹部の破片の可能性がある。18・19は第9区出土。なお、鴟尾片は第1次調査でも出土している（『藤原概報10』）。胴部に正段型を削り出すもので、今回出土したものとは様相が異なる。

図127は丸瓦広端部の凹面に細いヘラで図柄を描いた戯画瓦。モチーフは動物とも考えられるが、全体像がわからず断定はできない。

軒瓦の出土傾向は、金堂以南の第8・9区では、軒丸瓦Ⅰ・Ⅱ型式や軒平瓦Ⅱ型式、垂木先瓦A・Bなど、7世紀代の軒瓦の出土が多いのに対し、講堂以北の第1～6区では、Ⅲ型式やⅣ型式など、藤原宮期以降の瓦が比較的目立つ（表11）。このことは、金堂所用瓦が軒丸瓦Ⅱ型式と軒平瓦Ⅱ型式であることと、講堂と塔の所用瓦が

軒丸瓦はⅢ型式、軒平瓦はⅢ型式であることが反映されているのであろう。丸・平瓦については、奈良時代以降の資料も含むが、多くは粘土板技法を使用した、創建瓦と思われるものである。平瓦の叩きの種類は、縦縄叩きが多いが、格子や斜格子もみられる。また、瓦の焼成や胎土、色調に関しては、長石や石英を大量に含み、焼成が硬質～やや軟質で色調が赤褐色を呈するものが多いのも檜隈寺所用瓦の特徴といえる。（石田）

4 まとめ

丘陵各所に配した調査区の成果から、檜隈寺の所在する丘陵とその周辺での遺構の状況が明らかとなった。その中で、丘陵北東側の第5・6区において、寺院関連施設と考えられる遺構を確認したことは重要な成果である。第5区で検出した掘立柱建物SB800と東西塀SA795は、真北に対し23°～24°西偏する檜隈寺の伽藍方位と柱方向を同じくしており、7世紀後半に造営された主要堂宇と一連の施設であった可能性が高い。また、第5区の南北塀SA805、第6区の南北塀SA806は、ともに丘陵裾部を取り囲むように配されており、寺域を限る一連の区画施設であった可能性が考えられる。第5区北側の檀原考古学研究所の調査区でも、丘陵裾部を巡る塀と考えられる遺構を検出しており（檀考研『奈良県遺跡調査概報2008年』2009）、これらも同様の性格を想定できよう。以上の建物や塀は、丘陵から一段低いところに造成された平坦地に造られており、檜隈寺が丘陵全体を利用して寺院地を形成していたと推測できる。

また第4区では、調査区北端で、人為的に板石などを積み上げた石組遺構SX790を確認し、講堂北西の平坦地にも寺院関連遺構が遺存している可能性が生じた。

一方、丘陵南側の第7～12区では寺院に関連する遺構は確認できず、後世の削平が広範囲に及んでいることが判明した。特に金堂に隣接する第8区においても古代の遺構が検出できなかったことは、中世以降の削平が著しいものであったことを示している。

今年度の試掘調査では、遺構の一部を確認したに留まっており、その規模や性格を確定するには至っていない。2009年度に予定している本調査により、丘陵東裾部や講堂北西部における諸施設の様相を明らかにし、檜隈寺の伽藍の全体像を解明していくこととしたい。（若杉）